の収集した民話にはゲルマン的，ケルト的，キリスト教的，さらにはアラブ的な要素がさまざまに入り交じっており，それらを研究することは，そもそも文学研究の枠内では収まりきらない，脱領域的な視野を必要とする。

沖永良部では，記念碑や跡地を巡ったが，中でも水場が神聖な場であり，泉の周囲に人々が集まって集落を形成している。人々の生活空間と自然環境を知るためのこれらの経験は，生きる糧のひとつとしての水に対する思い入れを知ることになり，口承文芸が持つ自然崇拝の表現の多様性を読み解くひとつの鍵となった。また，テクストを「読む」という行為と，口承によって「聞く」という行為から生み出される表象の乖離を目の当たりにした。こうした想像と現実の乖離は実際に現地に赴かなければ体験できないことである。そのため，民話が生まれた14世紀の地域性や習慣が今どのように息づいているかを知るためは，実際に話が生まれた土地に赴き，現地の方から話を聞き，当時の様子との違いを確認する必要性を再認識している。

4．おわりに

上野は，今後，「ノヴァーリス及びドイツ・ロマン派における自然科学的環境と文学の関わり」というテーマで実地調査を通し，神秘学的な視点ではなく自然科学的な観点からノヴァーリスの一面を解釈していく予定である。ノヴァーリスが数学と詩を融合させようとした過程と成果について考察する中で，本来的な意味における文理融合型の研究を目指すものであるが，自然科学的な学問の発展とロマン派的な想像力の飛翔を可能にした鉱山というもののあり方を多角的に検証するために，現地調査は不可欠なものとしてある。鶴田は，博士論文では，「森と水」というテーマに即していくつかの民話を取り上げ，物語の舞台となった時代背景と，これら民話がグリム兄弟によって書き言葉にまとめられた当時の時代背景を検証し，それが受容されていく中でどのような変化を被ったかを明らかにしたいと考えている。今後，民話が生まれた地と環境の変化，またそれに伴う人々の心性の変化の視点から民話研究を進めるにあたり，ドイツの「シュヴァルツヴァルト野外博物館」を訪ね，森や泉に対する人々の捉え方の変化についての聞き取り調査と，それをめぐる言説の記録を行う計画である。文学作品には，その物語を生みだす感情とそれを生成するための環境がある。それは自然，つまり木，水，石，海，空など，人をとりまく環境が作者の五感によって感知され，思い出され，また表出されるものである。奄美での実地調査を終え，文学テクストと改めて向かい合った今，博士論文の執筆のためには，テクストが生まれた経緯や，テクストが書かれた時代状況，書いた人を取りまく環境を現地に赴くことで追究することが必要であるという認識に至った。テクスト分析と現地での実地調査が重なり合ったところに，文学研究の真髄をみることが出来ることを強く感じている。

日本における『アフリカン・ダンス』の広がり
――東海地区のダンス・クラスを事例に

菅野　淑　　文化人類学･宗教学･日本思想史専門　前期課程２年

筆者は，セネガルの首都ダカールにおける現代芸術（舞踊）に関する研究を主眼としている。対象としている舞踊は，日常的に人々の間で踊られているものではなく，舞台上でプロの人々が踊り，披露するものである。彼らはそれを，「バレエ・スタイル」の「アフリカン・ダンス」[1]と呼んでいる。そしてその「アフリカン・ダンス」は，セネガル人ないしその他のアフリカ人ミュージシャンを通じ，または習得しに現地へ行った日本人を通じて，日本へ紹介されている。

将来的に，現地（セネガル・ダカール）で調査することを踏まえ，現在は，日本における「アフリカン・ダンス」クラスに通う人々を対象に調査を行っている。なぜなら，日本でのクラスと，セネガルでのバレエ・カンパニーは密接に関わりがあるからである。

「アフリカン・ダンス」，「アフリカン・ドラム」[2]が日本に広がり始めたのは，1980年代後半辺りからである。その頃から日本国内で，西アフリカの音楽家の公演が開かれたり，日本人によるセミナーやワークシ

ョップ等の活動が行われたりし，紹介されてきた。1991年にヨーロッパで制作され，1993年に日本で上映されたドキュメンタリー映画『ジャンベフォラ』の影響により，さらにその広がりを見せた。そして現在では，先にも述べたが，アフリカから来日し，日本に在住するようになったミュージシャンや，1980年代からワークショップに参加していた人々が，東京を中心に公演や指導等の活動を行っている［柳田 2000：pp. 46−47］。

筆者が調査対象としている地域は，東海地区である。その東海 3 県（愛知・岐阜・三重）に存在する「アフリカン・ダンス」クラスは，現在のところ 1 つのみである[3)]。筆者が参加し，調査を行っているそのクラスは，2005年から始まったものである。その主催者は，セネガル出身の男性（S. A. D）である。彼は，2004年夏に日本人女性との結婚を機に来日した。現在は，彼の行う「ダンス・クラス」は，岐阜県多治見市と愛知県名古屋市北区の 2 箇所で定期的に開かれている。毎年12月中旬から 2 ・ 3 月までは，S. A. D が自国セネガルへ一時帰国するため，クラスは休みとなる。 4 月から12月初旬までが，主な活動期間である。筆者は，2006年 5 月から現在まで，継続して参与観察を行っている[4)]。

多治見クラスは，毎月第 2 ・ 4 水曜日に行われる。ドラムのジェンベ・クラスが18：15から19：45まで，ダンス・クラスが19：50から21：20までである。実施場所は，多治見市にある市の文化施設である。それぞれ受講料は月5000円で， 1 回のみ受講する場合は3000円である。ジェンベ・クラスの場合，ジェンベをレンタルする受講者は，そのレンタル代として，毎回500円をさらに支払う。

名古屋クラスは，月 2 回，基本金曜日にダンス・クラスのみが行われる。時間は，19：30から21：00までである。場所は，名古屋市北区にある市の文化施設である。受講料は， 1 回のみの場合は3000円， 3 回受講の場合は，先払いで7500円である。

受講者数だが，多治見クラスの場合，ジェンベ・クラスが 8 名，ダンス・クラスが10名程度，名古屋クラスの場合は，13名程度である。固定的なメンバーが大半ではあるが，毎回 1 ・ 2 名位，見学者や新規受講者が訪れる。

受講者の職業は，会社員や派遣社員，教師や自営業などと様々である。彼らの受講理由は，以前から「アフリカン・ダンス」や「アフリカン・ドラム」に親しんできたもの，Hip Hop やレゲエ[5)]などを好み，その延長上で始めたもの，何かダンスをしたくて受講し始めたもの，友人に誘われて参加したもの，などである。

彼らの中には，実際にセネガルないし隣国のギニアへ渡航経験があるものもいる。この S. A. D のクラスでは，本年度は実施されていなかったが，東京などに在住するアフリカ人ミュージシャンの多くは，自国へのワークショップ・ツアーを毎年のように行っている。これは， 2 週間から 1 ヶ月程度，「アフリカン・ダンス」や「アフリカン・ドラム」を現地で習おう，というツアーである。その時期は，12月から翌年の 3 月までの間に企画されることが多い。

参加者は，ともに参加した数人の日本人と一緒に現地の一軒家などに宿泊し，朝から夕方までダンスやドラムのワークショップを受ける。夜には，主催者側が企画したパーティに参加し，週末には観光地を訪れたり，市場で買い物を楽しんだりする。参加費用は，宿泊費，レッスン代，食事代などを含み， 2 週間で20万円程度である。そこに航空券代や海外旅行の保険代は含まれていない。参加費用が安くないにも関わらず，毎年多くの人が参加する。

このワークショップ・ツアーに参加したものの中には，その後，再び渡航し，今度は 3 ヶ月から 1 年程度も現地に滞在するものもいる。彼らは，日本にいる間は働き，お金を貯める。そして仕事を辞め，長期間習いに行くのである。帰国後彼らは，習得してきたものを日本人に教えたり，様々なイベントで披露したりする。

筆者が参与観察をしているこの S. A. D のクラスは，彼がセネガルへ帰国中のため，現在休止中である。だが，定期的に自主練習会を行っている。また，名古屋近辺で活動している，他の「アフリカン・ダンス」，「アフリカン・ドラム」グループとともに，イベントに出演したりもしている。

受講者たちは，「アフリカン・ダンス」を踊ることが大変好きなようである。それに加え，ダンス仲間と会うことも楽しみの 1 つであるようである。彼らは，仕事上でのストレスなどを，踊ること，仲間と会って話すことで解消していると感じる。現在彼らは， 4 月から再び始まる S. A. D のクラスを心待ちにしているようである。彼らは，もっと多くの種類の「アフリカン・ダンス」を習いたい，もっと「かっこよく」踊りたい，もっと「アフリカのこと」を知りたい，と思っている。そして，いつかは実際に「アフリカ」へ行ってみたいと考えているようである。

以上が，現在までの調査で明らかになったことである。

今後は，ダンス・クラスを受講する人々の，より詳細なパーソナル・データの聞き取りを行う。加えて，参加動機などについても同様に聞き取りを行う。また，名古屋近郊で行われているイベントやワークショップにも参加し，参加者やその様子について観察を行う。文献による調査も併せて行っていく。

注

1）「アフリカン・ダンス」と言っても，アフリカには数多くのそれらが存在しており，一言で述べられるものではない。だが，この報告においては，現在筆者が調査対象とし，フィールドワークを行っているダンス・クラスで踊られているダンスを，「アフリカン・ダンス」と定義する。それは，西アフリカ，主にセネガル・ギニア・マリで踊られているものである。

西アフリカの「伝統的」なダンスの特徴は，基本姿勢が一般的にコラップス（屈曲姿勢）と呼ばれるもので，膝と腰を軽く曲げ，胸が自然に地面と向き合うような形になるものが多い。また，身体の各部分を独立させて動かすアイソレーションというテクニックを使い，一人でポリリズムを表現するような動きが見られる［柳田　2000：p. 28］。

2）「アフリカン・ドラム」もダンスと同様である。このダンス・クラスで踊る際に使用されているものを指すことにする。それは，「ジェンベ（*Djembe*）」と呼ばれる西アフリカが起源とされる太鼓である。これは，マホガニーなどの1本の木をくり抜いた胴に，ヤギの皮を張ったワイングラスのような形をした太鼓で，素手で叩くものである。

他に，ベースになるリズムを叩くために「ドゥンドゥン（*Doundoun*）」と呼ばれる太鼓も使用される。これは，円柱にくり抜いた木の両端にヤギの皮を張ったものであり，バチを持って叩く。基本的に，「ドゥンドゥン」は，同型で大きさが若干小さい「サンバン（*Samban*）」とさらに小さい「ケンケニ（*Kenkeni*）」の3台で演奏される。

3）ダンス・クラスとして定期的に行われているのは1つのみである。しかし不定期で行われるクラスや，個人的にダンスとドラムのグループを作り，活動している人々も多くいる。

4）但し，2006年7月初旬から9月中旬までは，セネガル首都ダカールにて現地調査を行っていたため，参加していない。

5）Hip Hop やレゲエなどは，西アフリカの音楽がルーツであるとされる。他に，ハウスを踊っていた人が「アフリカン・ダンス」も始めるパターンをしばしば見聞きする。

引用文献

柳田知子　2000 『アフリカの太鼓で踊ろう　西アフリカのジンベとダンス』音楽之友社

伝世戦国貨幣調査の意義

飯田祥子・橋本明子　　東洋史学専門　後期課程3年

1970年代以降の中国では，考古学的な調査により，重要な遺跡や遺物の発見が相次いでいる。考古学界の関心が先史時代に偏ってきた日本とは異なり，中国においては文献史料が残る歴史時代に関しても考古学的資料を用いて相互補完的に研究することが常識となっており，それは日本の中国研究者にとっても同じである。

特に中国戦国時代（前403～222年等諸説あり）に関しては，最も信用に値するとされる司馬遷『史記』ですら紀元前一世紀に編纂されたものであり，年代的には300年から100年程度離れている，各国の年代記の断片をもとに編纂・再構成させたものであるなどの理由により，容易に依拠すべきではない点も存在する。それゆえ戦国時代研究にとって，一次資料もしくはそれにより近い出土文字資料の重要性は非常に大きく，出土資料を無視した研究は成り立たないと言っても過言ではない。

現に1980年代以降，出土文字資料の中でも簡牘帛書をもとに法律，制度，思想，医学，社会等の分野で，従来の文献史料に依拠していては探求しえないほど詳細な研究が進められており，膨大な研究成果が発表され続けている。

しかし，このような現状に問題がないわけではない。そもそも出土文字資料が考古遺物である以上，付随する考古学的なデータと総合的に検討されるべきである。それにもかかわらず，残念ながら中国考古学界の現状は充分な情報を広く公開できる状態ではなく，まして外国人研究者にとって遺物自体を実見するなどの機会は非常に少ない。中国の研究者の報告した整理済みの資料のみに依拠してしまう危険性を否定できない。

また，新鮮で重要な新資料の発見により，学界の注目がそれに集中し，冷静な議論がなおざりにされがち